

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：33905

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520834

研究課題名(和文)身体性構築における個人の主体性と多様性 衣服とタトゥを中心に

研究課題名(英文) Subjectivity and Diversity of Individuals on Construction of the Body: Focusing on Clothing and Tattooing

研究代表者

桑原 牧子 (KUWAHARA, MAKIKO)

金城学院大学・文学部・准教授

研究者番号：20454332

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はタヒチのイレズミの施術における物質性(道具と染料)と衣服の物質性(素材やスタイル)を分析し、タヒチ社会の人々がイレズミと衣服を通して階級、性、年齢、職業、エスニシティ、住居地域などの違いごとにいかに自らを差異化してきたか、西欧との接触期から現代にいたるまでの変化を検証した。植民地支配、近代化およびグローバル化による社会変化を受け、イレズミと衣服の物質性も大きく変化し、イレズミの施術と衣服の生産・着用にも影響を及ぼした。その結果、タヒチ社会の個々人の身体性構築もより多様化していった。

研究成果の概要(英文)：The research project analyses how people in French Polynesia have differentiated each other according to the class, gender, age, occupation, ethnicity, and residential area, by examining the materiality of tattooing (tools and inks) and that of clothing (materials and styles). By analyzing the practice of tattooing and clothing from the early European contact to the present, the project investigates various processes of corporeal construction in Tahiti. With social changes through colonialization, modernization, and globalization, the materiality of tattooing and clothing has been dramatically changed, which influenced the practice of tattooing and production and wearing of clothing. Consequently, the construction of individual corporeality has become varied accordingly.

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：フランス領ポリネシア 身体 イレズミ 衣服 タトゥー

1. 研究開始当初の背景

18世紀に西欧人探検家や商人との接触、さらにはキリスト教布教活動が開始し、タヒチでは人々の身体に大きな変化をもたらされた。西欧の衣服が着用され、習俗であったタタウ(タヒチ語で「イレズミ」)は禁止された。その後、西欧の衣服の素材や技術が導入され種類が増えたことで、着用する人の年齢、性、職業、エスニシティ、地域、経済の違いが明確に提示されるようになった。また、タタウは1980年代に復活してから多くの人々に彫られるようになった一方で、それを嫌う人や彫るべきでないとする人も存在し、人々のタタウの容認度に幅が生じている。

フーコー以降、人文・社会科学の分野では個人の身体を規制する制度化された権力について多くの研究が重ねられてきた。植民地化や近代化を受けての衣服やタタウも分析され、社会規範が変わるごとに衣服やタタウが社会・文化的に異なる意味づけをされてきたことが明らかになった。しかし、これらの研究は身体性が社会規範と個人の身体の相互作用によって構築されることを提示しながらも、社会規範の分析に重点が置かれ、個人の主体性の介入とその多様性について十分に説明していない。

筆者は修士課程では18世紀末から19世紀前半までの植民地状況下のタヒチのタタウの歴史について、博士課程では長期現地調査をもとに現代のタタウ・ルネッサンスについて、その後の共同研究ではタタウのグローバル化について研究してきた。これらの先行研究ではタタウが「彫られること」に焦点を当てたため、それが「彫られなくなった」19世紀前半からの約150年間をタタウの歴史の空白期間とみなし分析を行ってこなかった。しかし、この期間は社会と個人の関係が近代化していく上での過渡期であり、また、衣服が西欧化し、タタウの容認度が多層化する土壌をつくった期間とも考えられ

る。本研究は衣服の西欧化、タタウの空白期間、現代のタタウ容認度の違いに注目し、そこにみられる個人の主体性と多様性を検証していくことで、これまでのタヒチの身体性をめぐる歴史的・文化人類学的先行研究の不足箇所を補う。

2. 研究の目的

本研究は、個人が身体を通して構築する社会との関係が植民地主義、近代化、グローバル化を経ていかに変化してきたかを、タヒチの衣服とタタウを事例として取り上げながらみていく。特に衣服が西欧化し、タタウが彫られなくなった後に復活する19世紀半ばから現在にかけての時代を中心に、様々な個人とその身体を規制する社会規範が相互に作用し合いながら身体性を構築していくプロセスを明らかにする。先行研究では十分に分析されてこなかった個人の主体性と多様性を、文献資料の読み直し、画像資料の分析、インタビュー、参与観察によって丁寧に拾い上げていく。

3. 研究の方法

19世紀の衣服とタタウについては西欧人探検家の航海記録とキリスト教宣教師の日記、書簡、民族誌を、20世紀以降については現地新聞、雑誌、民族誌などの文献を収集する。既に収集している文献は整理し読み直しを行い、未収集の資料は追加する。身体性は観察者が見慣れることによって文書には記録されなくなる場合もあることから、写真、絵画、スケッチ、映像などの画像記録を広く収集しデータベース化し、文献と並行して詳細な分析を行う。現代のタヒチにおける身体性については、人々の衣服とタタウの変化の認識、趣味や時と場所と状況に応じた衣服の選択、タタウの実践とそれに対する感情や意見を、エスニシティ、性、年齢、職業の異なる人々を対象にインタビューと参与観

察を行って収集していく。また、タヒチ島都市部と村落における人々の衣服の着用とタタウの実践の分析を通して、それぞれの身体性の相違を比較する。

4. 研究成果

現時点で終えているのは、イレズミの道具や染料や施術プロセスの分析である。道具や染料の選択がどのようにされているのか、それがイレズミのスタイルや模様によどのような影響を与えているのかを検証した。また、フランス国立図書館などで収集した19世紀、20世紀のポリネシア人の肖像写真やタヒチ島パペーテにおける現代のポリネシア人のファッションを分析した。

イレズミは身体に非可逆的な模様を彫り込む行為であり、被施術者に生得および成長・加齢と共に獲得する身体性に加えて人工的に新たな身体的特徴を持たせる。タヒチにおけるイレズミの施術は、道具に関しては伝統的な道具、改造された携帯用電気髭剃り、欧米のタトゥーマシンで施行され、染料は伝統的な天然のもの、チャイナ・インク、欧米のタトゥー・インクが使われている。他方で、衣服は木綿や化学繊維などの素材、スタイルやプリントや色などの物質性が異なるものからなり、着用する人の年齢、ジェンダー、エスニシティ、職業などを示し、また冠婚葬祭の衣裳、仕事着、日常着等、時、場所、場面ごとに分けられて着用されている。

イレズミは身体を染料というモノとハイグリッド化させる行為であり、その皮膚に込められた性質は一過性のものではない身体的特徴として現れるようになる。衣服は着用する者の皮膚を覆い、その上から皮膚と同じような役割を担うが、イレズミとは異なり着脱が出来る。イレズミは染料というモノを皮膚内に彫り込んで皮膚を物質化させ、衣服は布というものを皮膚の上に覆うことで、皮膚と同じように身体の保護やアイデンティテ

ィの表示を行い、布を身体化させる。

タタウと衣服の歴史分析においては、18世紀から現代に至るまでの社会制度、信仰、民族構成の変容に沿った、タタウと衣服の役割の変化を考察した。西欧人接触以前、ポリネシア人は神聖・世俗を基準に自らを差異化するタブと呼ばれる制度を持ち、身体を包む行為を通してそのタブを体現化してきた。西欧との接触後は、同様に包む行為を通して西欧文化をタヒチの文化体系に組み込んでいった。その際、首長たちはキリスト教に改宗し宣教師との関係を上手く利用しながら、自らの政治権力を確立していった。西欧人探検家や貿易商との関係においても、西欧の物資、特に火縄銃に付属しているとされていた西欧のマナ（オセアニア全域でみられる超自然的な力）を、タイオ関係（友好同盟）を利用することで取得し、政治的に対立する首長の力を抑えた。首長たちは、西欧の物質文化を自らの政治的地位の確立・強固のために積極的に取り入れ、衣服に関しても、西欧のものを纏うようになっていった。

キリスト教化が進んだ18世紀のタヒチについての宣教師や西欧人探検家の記録を分析すると、ポリネシア人にとって、衣服とタタウは、社会内、及び社会の外から来た他者を自らのシステムに取り入れていく重要な役割を担うものであったことがわかる。衣服とタタウは、異なる文化的背景を持つ人達の相互関係を通して新しい意味を持ち、変化していった。衣服は着脱が可能であり、状況ごとに、ある時は西欧の衣服、またある時はタヒチのアフ（伝統的な樹皮布で作られた衣服）と、着分けが可能であった。その点において、衣服はタタウより激しい社会変化に個人の身体を適合させるのにならっていたといえる。接触以前のタヒチ社会においては衣服もタタウもどちらも身体を包む媒体であったが、キリスト教化の進行する中で衣服は包む媒体のまま、タタウは包む対象として変

化していった。

近年、フランスの海外県「フランス領ポリネシア」としてネオ植民地的状況のもと、タタウはポリネシア人の民族アイデンティティを表示するものとして彫られるようになった。同時に、タトゥーのグローバル化はフランス領ポリネシアにも押し寄せ、欧米のタトゥーデザインや日本の刺青風のデザインも好んで彫られるようになった。また、宣教師の家族が持ち込んだ木綿製の衣服やパッチワークの布も民族アイデンティティ構築の文脈のもと発展を遂げている。衣服もパッチワークも原色を配したコントラストを上手く生かし、島に生息する花や果実のデザインが施され、「ローカルな」衣服として、または、手芸として（パッチワークはポリネシア語で「ティファイファイ」と呼ばれている）ポリネシア人に作られ、纏われ、使用されている。

多様なタタウ・タトゥーを施術することが可能な中、フランス領ポリネシアの人々のタタウ・タトゥーのデザインの選択には、被施術者の民族アイデンティティ（ポリネシア人、客家、フランス人、それらの混血）、ジェンダー、職業、出身地（諸島や島）などが反映されることが多い。しかし、そのような素姓とは無関係に、被施術者の個人的趣味が優先され、タタウ・タトゥーのデザインがより自由に選ばれてもいる。特に、本研究の調査期間中、ポリネシア人は日本の刺青風、もしくは、ポリネシア全域のイレズミ模様がハイブリッドに配置されたデザインを好み、フランス領ポリネシア在住フランス人や欧米観光客は伝統的なマルケサスのイレズミを好んで彫る傾向が観察された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計1件)

桑原牧子、身体の物質化 マルケサスのイレズミの道具と染料の変化を中心に、年報人

類学研究、査読有、4巻、2014、78-91

〔学会発表〕(計1件)

桑原牧子、「エイジェントとしてのタトゥーと物質性の変化」モノ・コト・時間の人類学 南山人類学研究所共同研究会、南山大学、2012年5月23日

〔図書〕(計1件)

Makiko Kuwahara, Living as and Living with Mahu and Raerae: Geopolitics, Sex, and Gender in the Society Islands, Niko Besnier, Kalissa Alexeyeff 編集 Gender on the Edge: Transgender, Gay, and Other Pacific Islanders, 2014, Honolulu: University of Hawai'i Press, pp. 93-114

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桑原牧子 (KUWAHARA, Makiko)
金城学院大学・文学部・准教授
研究者番号：20454332

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：